

大阪 淀川探訪 ～ 絵図でよみとく文化と景観 ～

編著者 西野由紀 鈴木康久 出版社 人文書院

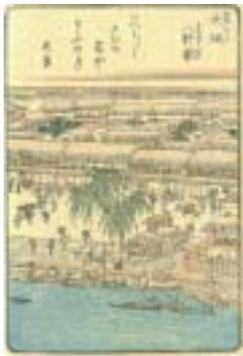
<発刊の趣旨>

淀川を往来する三十石舟、棹を持つ船頭、渡しの茶屋でくつろぐ旅人。これが江戸時代の川か。川や木々、家屋などの「静」の部分と人々や舟の「動」の部分を組み合わせた構図が面白い。今と何が違うのだろうか。暁鐘成が編著、松川半山が挿絵を担当して文久元年（1861年）に出版された『淀川兩岸一覽』の絵図にある情景を求めて、水辺を歩いてみたい。これが原著の原点です。

絵図に描かれた淀川から宇治川、鴨川へと上り、大阪と京都をつなぐ「川の街道」は、古来より多くの人々が往来し、様々な物資を運搬する大動脈であったことは言うまでもありません。この街道を文化と景観の視点から150年間の変遷を辿ることで、次世代に伝えるべき川の本質が見えてくるのでは、そんな想いを持って最初に手がけたのが『京都 宇治川探訪』。宇治川が重要文化的景観に選定される一助にとの願いも込めて2007年に刊行しました。鴨川も書いて欲しいとの声に押され2010年に『京都 鴨川探訪』を刊行。そして、「川の街道」の完結版とも言えるのが、本書『大阪 淀川探訪』です。

<本書の特徴>

ページを開くと、江戸時代の淀川の風景（色刷り）が目に飛び込んできます。現在の状況を示した写真。戦前の絵葉書などで150年間の変遷を知ることができます。街道沿いの名所・旧跡についての和歌や漢詩などを読み説き、当時の民衆の淀川への思いを伝えるようにしました。



※ 港の賑わいを感じる「大坂 八軒家」

本書は3章で構成しており、第1章では日本で最初の治水工事である「茨田堤」の築堤が行われた淀

川の治水史とこれからの方向性について。第2章では、『淀川兩岸一覽』の絵図から当時の旅人の様子などを多彩な資料で解説。第3章では、平安時代に別業の地であった淀川三川合流の情景を貴族や文豪はどのように描写したのか。「枚方の宿」の景観の変遷や三十石舟の船旅について、最後に水都大阪の河川景観の変化について記載しています。

【主要目次】

- 第1章 淀川 都市を貫く流れ（執筆：宮本博司）
- 第2章 絵図からみた淀川（執筆：西野由紀）
 - 1.大川ゾーン（八軒家、天神橋、毛馬など）
 - 2.淀川ゾーン（守口駅、枚方渡口、天王山など）
- 第3章 移りゆく流れとその眺め
 - ・三川合流をめぐる景観の変遷（執筆：大滝裕一）
 - ・「川の道」淀川と枚方の宿（執筆：鈴木康久）
 - ・水都大阪のいま（執筆：平野圭祐）

執筆に際して、カヤックで淀川を下り、絵図の場所を歩いてみました。その度に淀川の悠々とした流れに圧倒され、何も考えられませんでした。その中で見えてきたのが、それぞれの場面において時間と空間をつなぐのが文化であり、景観であると思えます。無論、淀川の雄大さは「文化」や「景観」だけで表現できませんが、少しでも淀川の「川の力」を伝えることにつながればと願っています。

（カッパ研究会 鈴木康久）

編著 西野由紀 鈴木康久
 出版 人文書院
 定価 2200円＋税
 問合せ 075-603-1344（人文書院）

